

「生命の教育」創始者 谷口雅春先生 今月の言葉

子供の内なる神の力を信じましょう

子供の教育とは、実はまず親の教育

私はここに本当の人間の教育ということ、その本当の人間を造るところの「子供の教育法」を説こうとするのでありますが、この子供の教育ということは本当は大人の教育なのであります。だから、私は子供の教育を説く前に先ず大人に説く倫理を以てしたのであります。子を良くするには先ず親を教育しなければならぬ。それ程親の心は子に影響を与えるのであります。

(新編『生命の真相』第22巻13頁)

悪は見ずに、常に善い方面を見る

子供は最も多く母親のなすこと、いうことの影響を受けるのでありますから、母親の性質と心持、態度と、いうものが子供に最も多く現れて来るのであります。でありますから、皆さんがお子さんにもっとよい性質がほしいと思われたら、先ず自らを省みて自分がよくなって頂くことが肝腎なのであります。

子供というものは、「お前は悪い悪い」と叱つてもなかなかよくなるものではありません。常に善い方面を見

るようにして、悪は見ずに、子供の完全円満な実相を見るようにして、それを賞め言葉で誘導していれば必ずよくなって来るのであります。(中略)命令や吩咐よりも、行いで手本を示されますと、子供は直ぐその真似をするものでありますから、常に子供によい実例を示し、常によき行為の模範になることが大切であります。

(新編『生命の實相』第22巻71〜72頁)

子供を信じる褒め言葉が、子供を善くする

親の心が子に映るのが実際の事実としたならば、親達はもう少し考え直さねばならないだろうと思うのであります。子を教育する前に先ず親が自らを教育しなければならぬと考えざるを得ないのであります。

子の成績が悪いというのも、親、或は学校の先生が悪くしている場合が多いのであります。千葉県ちばけんの白里村しろさとむらに小倉久之丞さんという小学校の先生がおります。(中略)或日、他の教室の授業時間を参観しておられましたら、

その組の受持の女の先生が一人の子供をつかまえて大変怒っておられたのです。「お前位出来の悪い子はない。実にお前はなまけものだ。先生の教えを少しも注意してきかない」といってひどく叱られていたのであります。やがてその時間がすんでから、徐ろに小倉久之丞先生がその子に近付いて「あなたは好い子だねえ」と静かにお褒めになったそうであります。「あなたはよく勉強するね、きつとよく出来る子になるよ!」と柔しい、しかし、子供の善さを固く信ずるような語調で、簡単にほめられたのでありますが、それ以後その子の性質が一変して、大変よく出来るようになったのであります。その事実を見て、職員会議の時にその女の先生が起ち上って告白されたそうであります。「私のこれ迄の子供の教え方は間違っていました」といって皆の前で懺悔されたということでありました。単にそれだけの優しい、信じてくれる賞め言葉が、子供を善くするのであります。「お前はほんとによい子だよ」という、それだけの言葉にすら子供を生かす力があるのであります。それ

に先生がヒステリーを起して、「こんな悪い子はありやしない」なんて怒れば、子供は正直なもので、「先生は偉い」と信じきっているのでありますから、その偉いと思われている先生が、「自分を世の中で一番悪い子だというんだからほんとにそうかも知れない」と、子供がそう思ってしまったが最後、勉強に興味がなくなり、先生に嫌われたと思って、教室にいても面白くなく成績もずっと悪くなってゆくのではありません。ちよつとした言葉で子供が良くもなり、悪くもなる、通信簿に書いてある子供の成績は、実は親の成績表であり先生の成績表だといつて好い位であります。

(新編『生命の實相』第22巻20〜23頁)

子供を生かしているのは神の力である

多くの母親は子供のことをあまりに取越苦労するため、却つて子供に悪思念を放送して子供の健康や運命を害している。或る母親は一瞬間でも自分の眼の前にな

いと心配でたまらないのである。彼は自分の想像の中で、躓いて転んでいる自分の子供の姿を思い浮べる。自動車にひかれて死にかかっている自分の子供の姿を思い浮べる。水に陥つて溺れかかっている自分の子供の姿を思い浮べる。世の母親よ、何故あなたはこの反対をしてはいけないのか。こんな取越苦労が起るのは、子供を神の子だと思わないで人間の子だと思ふからである。神の子は神が育て、人間の子は人間が育てる。人間の子だと思ふものは終世、取越苦労をして育てねばならぬ。子供を神の子だと思ふものは、子供を尊敬して出来るだけその世話をさせては頂くが、神が守つてい給うと信ずるが故に取越苦労は必要はないのである。人間力で子供を生かし得ると思ふなら終日終夜起きて子供の番をしておれ。それは出来なからう。出来ない間に子供を生かしているのは神の力である。

(新編『生命の實相』第22巻2頁)